

風景との対話

「わたしの戦後事初め」

木崎、甲子郎（昭26理・地鉱）

敗 戦の年の8月初めわたしは横須賀陸軍要塞重砲兵学校の士官候補生だった。

いよいよ本土決戦だということで、九州出身者は郷土を守るべく、北九州、小倉師範学校に滞在して、命令を待っていた。

広島に新型爆弾が落ちた。つぎは長崎に落ちた。あれは、小倉に落とすはずだったが曇りであっちに行ったのだ。という噂があった。戦後、新聞であの噂は本当だったとわかって、わたし達はそれで命拾いしたのだが、あの時期なんであんな噂が流れたのか不思議だ。

そのあとに玉音放送が流れた。よく聞き取れなかったが、負けた、ということだけはわかって、やれやれ。どうせ玉砕だと覚悟を決めていたのだから、負けて悔しいなどという気持ちはさらさらない。

八 月末に候補生隊は解散となり、退職金600円と米や乾パンなどの食料をもらってそれぞれ故郷に向かったが、わたしの家は北海道の山の中の炭坑だ。し

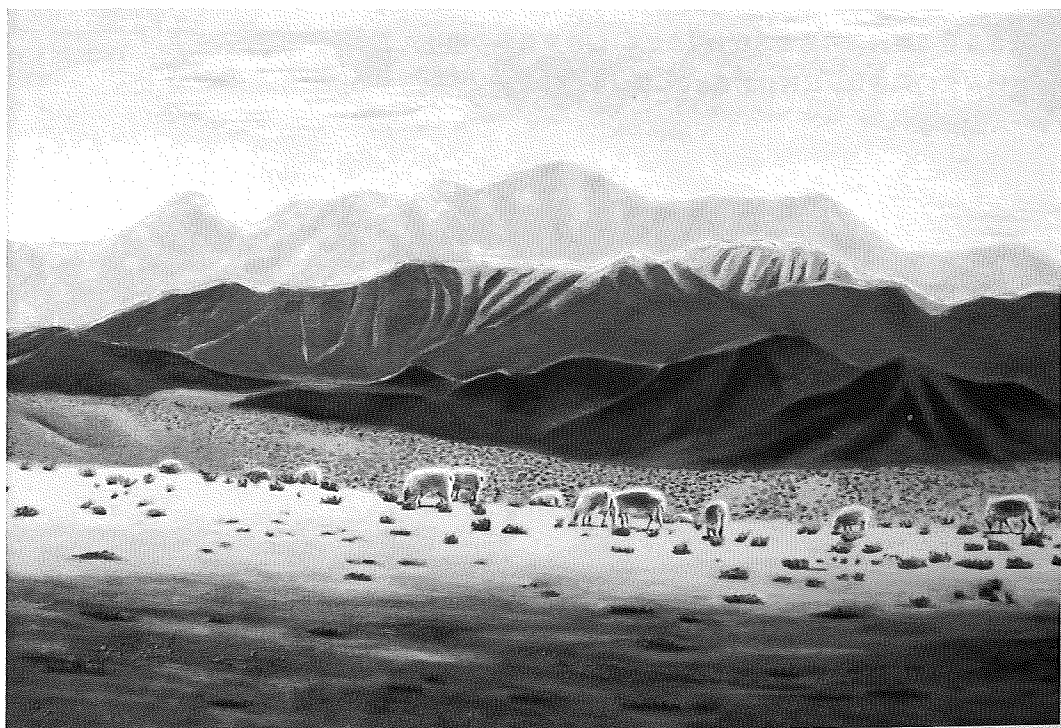
ばらく様子を見ようと、母親の故郷大分の在にある祖母の家を訪ねた。祖母は「よう来た、よう来た」と迎えてくれ、そして、久しぶりの白い飯とみそ汁を堪能した。

九月も過ぎて、痩せた身体に肉もついてきた。なんとか行けそうになったので、まずは大分から機帆船を捕まえて呉に渡った。そこから汽車に乗ったが、ぎゅうぎゅうに詰め込まれて通路に立ったまま身動きも取れない状態で東京まで。ちらちら見える沿線の町は焼け野が原だった。

とにかく上野駅までたどり着いたが、青森行きの列車が何時出るかわからない。

出るまで待とうホトトギスだ。駅前の階段に座り込んで夜を明かす。祖母が作ってくれた弁当もまだ残っている。カビが生えているが食べた。とくに不味いわけではないことを発見したのは空腹のせいだ。

翌日、やつと青森行きの列車にもぐり込む。函館から室蘭回りの列車もあいかわらずの混みよう



羊群声なく F 50 (117 × 91cm)

新疆ウイグル自治区とパキスタンとの国境、クンジュラフ峠（4730m）は、8年前ムスターグアタ峰の麓まで行ったとき以来だ。国境警備兵に追い返されて帰り道。羊の群れに会った。羊飼いや牧舎も見当たらず。羊はひたすら枯れ葉をつまんでいた。

だったが、千歳を過ぎた頃ようやくデッキが空いて、わたしはドアの側に座り込んだ。

これから先のこと、どうして生きていこうかなどを、とつおいつ考えていた。ふと見ると、誰かが尻に敷いていたらしい汚れた北海道新聞がそこにある。何気なく拾い上げ、眺めていたら、「北大で復員軍人を別枠で入学させることになった」と出ているではないか。

帰宅して喜ぶ両親の相手もそこそこに、北大に、入学したい旨手紙を出したら、すぐ返事が来て面接するから大学の予科事務室に頭せよとのこと。そこでもにもかくにも札幌に行く。予科事務室に重砲兵学校在学証明書を提出すると、別室に案内された。

机の向こうには、教師と思われる中年の紳士が座っている。わたしは直立不動の姿勢である。

「では口頭試問を行います」

「はい」

「ここに黒い粉末が山盛りに積んである。これが鉄粉か木炭の粉か、見分けるにはどうしたらよいか」

「はい、磁石を用いればよいのであります」

「よろしい、合格」

「木崎、帰ります。ありがとうございます」

というわけで、なにがともなく、10月1日付で予科理類1年に編入されることになった。始まってみたら復員組がひとクラス分くらいいた。

た

またま山岳部のルームの前を通ったばかりに、わが人生に山登りがつきまとう羽目になった。予科のときは山登りに夢中で、出席日数は三分の一に満たず、今の大学なら出席日数不足で自動的に留年だ。しかし、幸いなことに、出席をとるのは英語とドイツ語の先生だけだった。土曜日など、サブルックを背負って学校へ行き、講義中、教師が黒板に何か書いてる隙を狙って窓から飛び出し、札幌駅に駆け込んだりした。

学期末には掲示板に成績表が発表される。平均点60点のところは赤線が引かれて、赤線以下の者は落第で指導教官のもとに出頭して弁明しなければならぬ。

「父が亡くなりまして…」とか見え透いた嘘をついても、「この次はもすこし勉強しろ」と勘弁してくれぬ。

成績が悪くても、出席率低くても、学部移行の試験もなく、なんとか学士様になれたのは、貧しくても、古き良き戦後であった、といつておこう。



活がに・冷凍加工 / 無添加水産缶詰類

オホーツクの新鮮な海の幸を、お届けします。

有限会社 デリカ食品

TEL: 0158-24-3338 FAX: 0158-24-4964

第一工場 〒094-0007 北海道紋別市落石町3丁目16-3

第二工場 〒094-0011 北海道紋別市港町8丁目2-23